

地域活性化を志す農業女子の広域連携の研究：柔軟なプラットフォームによる活動支援の可能性

北陸先端科学技術大学院大学 助教 坂村圭

1. 背景

農村の女性による起業は、2010年に9,757件に達した（農林水産省, 2012）。農村女性起業家の特徴が、ビジネスとしての成功だけでなく、地域や社会ともっと関わりたいという「志」を有していることである（宮城, 1996）。実際、農村女性起業家による売上は年平均300万円以下のものが約5割を占めるが、起業数は毎年増加しており、活動内容も女性の地位や就農環境の向上から、環境保全や地域の課題解決へ移っている（西山, 2012）。農林水産省も2013年から「農業女子PJ」を立ち上げ、女性農業者の感性や志を活かした事業支援を開始した。地域活性化を担う重要な存在として、農村の女性への期待は益々高まっている。

一方で、若手女性農業者（以下、「農業女子」とする）に着目した際に、起業をはじめとした新事業立案の支援体制は十分に確立していない。女性農業者は世代によってライフコースや農業・社会とのかかわり方を変化させている（澤野, 2014）。今後は、ネットワークや地域を超えてつながる現代社会を前提にした、今までにないユニークな広域連携と協働による支援が農業女子の活躍のために必要となるだろう。

本事業の対象地とする石川県は、都市と農村の関係が近く、農産物だけでなく生態系サービスをはじめとした多面的な機能が都市部に供給されてきた。しかし、グローバル経済の進展や少子高齢化社会の到来などにより、年々農業人口・耕作面積は減少しており、農業だけでなく農村での生活を支える交通、福祉などの社会基盤も脆弱化している。

このような中、石川県では、いしかわ農業総合支援機構（以下、「INATO」とする）によって、IMJ（石川でミラクルを起こす女性たちの略称、以下、「IMJ」とする）という農業女子組織が設立された。IMJでは研修会やWSの開催だけでなく、民間企業と農業女子の共同商品開発が支援されている。しかし現在のところ、農村特有の慣行の制約もありIMJの活動に大きな進展はない。今後は、商品開発だけでなく農業・農村問題の解決に貢献する農業女子の連携体制構築が望まれる。

2. 事業目的と概要

本事業では、石川県の農業女子と地域とのつながりを強固なものとし、さらに彼女等が地域活性化に向かう連携活動を行うプラットフォームの構築を目的とした。具体的には、調査活動として、「①石川県の農業女子の実態とそのコミュニティ参加による参加者への影響の解明」を目的に、IMJの運営母体であるINATOへのヒアリング調査、IMJ中心メンバーの農業女子へのヒアリング調査、IMJ参加者へのアンケート調査、を実施した。また、実践活動として、「②農業女子のコミュニティの持続的な発展に貢献すること」を目的に、セミナーの開催、先進事例視察ツアーの実施、大学生との交流、広報誌の作成を行った。

3. 調査活動の実施報告

まず、調査活動の結果を報告する。本年度は、以下の3つの調査を行った。

3-1. INATOに対するヒアリング調査

まず初めに、IMJの設立のきっかけと活動内容の把握を目的とした、運営母体であるINATOへのヒアリング調査の結果を報告する。調査は、2018年5月から10月にかけて、複数回INATOの担当者に対して行った。

1) IMJ設立の経緯

地域活性化を担う重要な存在として、農村の女性への期待は益々高まっているが、農村特有の慣行の制約などが影響し、既存の地縁的な組織への女性農業者の参加は進んでいない。また近年では、女性農業者の感性を活かした商品開発や事業展開が注目されはじめているが、石川県の女性農業者が知り合い情報交換をする機会は限られていた。このような時に、女性農業者から「同世代の横のつながりが欲しい」「学ぶきっかけが欲しい」「情報収集したい」という要望が多くあり、2013年に(公財)いしかわ農業総合支援機構(INATO)が中心となって、農業女子のためのコミュニティ、「石川なないろ～I☆M☆J～(以下、IMJ)」が結成された。このような経緯があったため、IMJの設立目的は、女性農業者の緩やかな横のつながりを創出し、自立的な農業活動を支援することとされた。

2) 活動の仕組み

女性農業者の「緩やかな横のつながり」の構築を生み出すために、IMJでは、参加の入退場が自由、代表者・役員を設けない、定期ミーティングを行わない、会費無料などの、組織の規則が設けられている。一方で、この緩やかな横のつながりを重視したことで、特定の農業者が中心とはならない組織構造が採用され、事業計画やその実施のための調整などは、INATOが中心となって行なうことになった。現在、INATOは、農業者との協議をもとに事業計画を策定するだけでなく、事業実施段階では協働相手を探すことを行っており、また団体運営者として参加者の呼びかけ、会場のセッティング、予算の管理なども担っている。

3) 活動の内容

現在、IMJは、「モノづくりワーク(商品開発)」「販売研修・販売会」「交流会」「先進事例の調査」「情報提供」などの活動を行っている。

「モノづくりワーク(商品開発)」は、商品開発の成功体験などを通じて、女性農業者ならではの発想とその影響力に気づき、その後の自立的な農業活動に寄与することを目的に行われるものである。2015年から、農業女子の有志が県内の企業と共同で1年を通じて商品開発を行うプロジェクトが開始されており、初年度には能美市のルバンシュという自然派化粧品メーカーとの共同商品開発で、口に入れても安心なハンドクリームが開発された。その後、HUM&Goという企業と連携し、乾燥野菜を使った商品開発も行われている。これらの出会いは、INATOの働きかけによって、6次産業化支援の専門家が調整を行い、企業との連携が実現したことによる。

また、「販売研修・販売会」は、様々なターゲットに合わせた販売計画・手法について、

首都圏百貨店バイヤー等による講座や実践を通して学ぶ活動である。この事業のきっかけは、2014年から、伊勢丹が、「食品だけでなく地域を元気にする活動を応援する」という想いのもと、石川県の農業女子に着目した都内のデパートでの販促支援を始めたことであった。現在は、伊勢丹のバイヤーが、農業女子の希望者向けに販売やマーケティングの研修を行い、三越伊勢丹をはじめとした県内各所で販売研修を行っている。

3-2. 農業女子に対するヒアリング調査

2018年5月に、IMJに参加する農業女子4名に個別にヒアリング調査を実施し、農業活動をはじめたきっかけ、現在の農業活動の概要、今後の農業の目標を伺った。

本調査からは、女性が農業に携わるきっかけが、結婚や相続などの様々な事由に起因していることが分かった。多様な農業者がスムーズに農業を始められるように、今後は、ライフコースの様々な場面で、農業の技術支援や情報提供が提供されるが望まれる。また、多くの農業女子が、農協を介さない出荷や、他業種とのコラボレーションなどによる商品開発の工夫を行っていること、さらには地域活性化や農業人口増加に対する高い志をもっていることも伺えた。今後も、農業女子の農業とのかかわりや地域との関わりの意向を詳細に調査し、農業女子が望む農業支援を実態に沿って明らかにしていきたい。

3-3. IMJ参加者に対するアンケート調査

2019年2月12日～22日に、IMJ参加者のうち連絡可能な全74名に対して、郵送のアンケート調査を実施した。調査内容は、IMJ参加のきっかけ、IMJ参加の影響、IMJの活動に対する満足度などとした。なお、回収率は45.2%（33名）であった。

1) IMJ参加者の属性

図1のように、IMJ参加者のうち30～40代が81%を占めており、比較的若手の農業者が活動に参加していることが分かる。また、図2からは、経営に関わっている比率が78%と高いことも伺える。また、回答者の居住地は、能登地域から加賀地域まで様々で、IMJの活動に広域な居住地からの賛同があることも分かった（図3）。

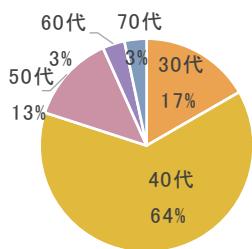


図1：IMJ参加者の年齢層

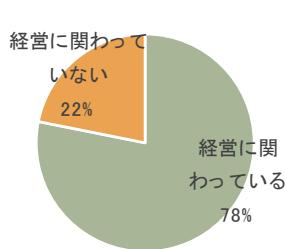


図2：IMJ参加者の経営参加率

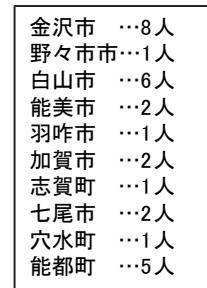


図3：IMJ参加者の居住地

2) IMJ参加の目的と参加の状況

図4は、IMJに参加した目的をまとめたものである。IMJ設立時の女性農業者からの要望にもあったように、6割以上の方が「農業女子の知人づくり」「農業などのスキルアップ」「農業に関する情報獲得」をIMJ参加の目的に挙げている。

一方、図5は、昨年度のIMJ参加者の活動参加状況をまとめたものである。現在、49%が、「昨年度一度も活動に参加していない」という状況にある。この理由をまとめたものが、図6であり、「参加する時間がない」「活動の雰囲気が分からぬ」などが不参加の理由として挙げられている。自由意見からも、参加メンバーに偏りがあることや、活動に固定メンバーがいるなどの不満が少なからず挙がっている。このように、広域的なコミュニティをつくることや、緩いつながりをつくるということに対して、活動地の選定や、活動の幅を設けること、多様な参加者に対応するなどの課題が存在していることが伺える。

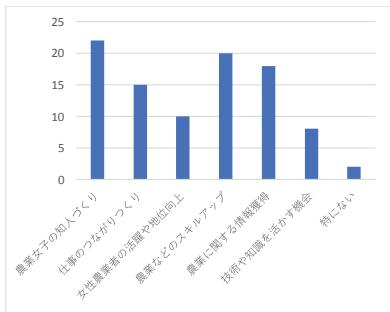


図4：IMJへの参加の理由

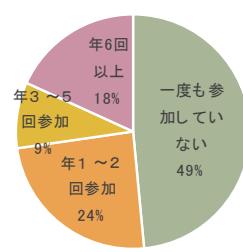


図5：昨年度の活動への参加

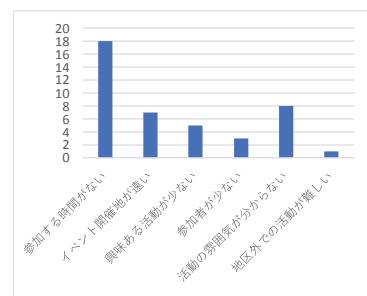


図6：活動に参加しない理由

3) IMJ参加の影響と活動に対する評価

IMJへの参加によって生じた影響をまとめたものが、図7である。「新たに生まれた人のつながり」に関しては、女性の知人・友人の増加をはじめ、多くの参加者がその影響を実感している。一方で、「農業活動の変化や影響」「自身への変化や影響」を十分に実感している参加者は少なく、IMJの活動が農業や自己の成長には十分に結びつくまでには至っていない。

現在、IMJの活動の継続に否定的な意見は、10%未満と少ない（図8）。一方で、活動内容や参加方法に満足していないメンバーが多いことから、IMJに対する満足度は36%と非常に低い状況にある。今後、IMJのプラットフォームを強化して、参加者の満足度を上昇していく事が一つの課題となるだろう。



図7：IMJ参加が与えた影響



図8：IMJに対する満足度と継続意向

4. コミュニティ活性化にむけた実践活動の実施報告

ここでは、IMJ のプラットフォームの強化のために行った活動報告を行う。本年度は、既存メンバーが IMJ の活動に積極的に参加すること、外部の視点から IMJ のコミュニティを捉えなおすこと、IMJ の活動を外部に発信することを目標に、以下の 4 事業を実施した。

4-1. セミナーの開催

2018 年 5 月 24 日に、「農業女子の魅力を知る伝える」と題して、金沢駅前ポルテ 9 階でセミナーを開催した。ゲストには、フリーアナウンサーの宮川俊二氏を招き、農産物の魅力をどのように消費者に届けていくべきかについて、実践例をもとに講演していただいた。なお、セミナーの後半は、講演の内容を実践していくことをねらいとして、自分の魅力を伝える自己紹介のワークショップを行っている。当日は、農業女子をはじめとして 60 名近くの参加者がいた。講演内容を知識としてインプットするだけでなく、農業女子が IMJ の活動に参加するきっかけや、様々な人と知り合う機会になったと思われる。

4-2. 先進事例視察ツアーの実施

2019 年 2 月 26 日～27 日に、IMJ 参加の農業女子 3 名と共に、神奈川県の生産者グループ「かなセブン」の方々の案内で神奈川県の農場視察を行った。当日は、若手生産者の横浜中華街と連携した商品開発の取り組みのほかに、自らが生産する 95% の農作物を直売所で販売する農家、年間 100 種類以上の生産を行う都市型農業を行う農家の方からお話を聞くことができた。先進的な取り組みを学ぶと共に、石川県と神奈川県の農家の強いきずなをつくりあげることに貢献できたと思われる。

4-3. 農業女子と大学生との交流

2018 年 11 月から 12 月にかけて、北陸先端科学技術大学院大学の学生 4 名と共に、IMJ に参加する農業女子の農場の視察と手伝いを行った。協力いただいた農家は、能登町でブルーベリー栽培を行う平美由記さん、羽咋市で常時 50 種類近くの野菜を栽培する濱田友紀さんの二名である。枝の選定作業や、花の矯正の作業を通じて、自然に根差した農業の知識と技術、農業女子の日々の暮らしなどを体感することができた。また、農業女子の方からも、学生の視点から自分たちの活動を振り返ってもらう良い機会だったという感想を頂いた。



写真 8-10：農業女子と大学生の交流の様子

4-4. 農業女子の広報誌の作成

主に、上記の農業体験をもとに、学生 4 名と共に農業女子の活動を広報する冊子を作製した。内容は、農業女子の現況、IMJ の活動、農業女子の暮らしなどを 12 ページにまとめたものである。冊子は 300 部印刷し、県内の農家を中心に配布を行った。このような事業を通じて、農業女子の魅力や IMJ の活動をより多くの人に周知していきたいと考えている。

5.まとめ

本事業では、石川県の農業女子と地域とのつながりを強固にするプラットフォームの構築を目的として、調査活動と実践活動の両者を行った。調査活動では、IMJという農業女子コミュニティが、既存の地縁的な農業組織とは異なり、緩い横のつながりの構築を目的として設立され、女性同士や他分野にまたがる新たな人のつながりを生み出していることを明らかとした。また、アンケート結果をもとに、プラットフォーム構築の課題として、「自助的な活動を推進・継続する回路の不在」「コミュニティ活動を自らの地域に還元する回路の不在」「広域的な連携という特性を活かした活動の不在」の三点を指摘した。

一方、実践活動としては、IMJのメンバーが一堂に会す機会を創出することや、IMJの活動のさらなる周知、外部の視点から活動を振り返る機会の提供などが行えたと考えている。今後は、調査活動で明らかとなった課題をもとに、更なる調査活動と実践活動の両者を実施し、農業女子の魅力的な活動を支援し地域活性化に結び付けていきたいと思う。

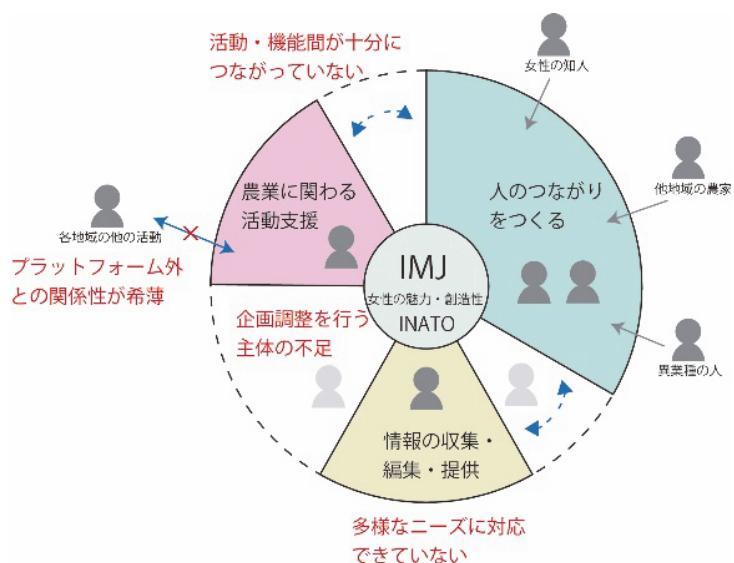


図9：IMJのプラットフォームが抱えている課題のまとめ

6.今後の活動

来年度以降も、INATO・IMJと連携して、石川県の農業女子の活動を推進し、地域活性化に向けて活動を継続していく事が決定している。今後は、本年度に明らかとした課題をもとに、広域の「緩い横のつながり」を推進・活用して新たな価値創出を行う予定である。

＜参考文献＞

- ・澤野久美(2014)「農村女性起業研究の動向と展望」農業経済研究, Vol186, No.1, p.27-37
- ・西山未真(2012)「地域再生のための農村女性起業の役割と課題—高知県四万十町旧十和村「おかみさん市」を事例として—」『村落社会研究 48 農村社会を組みかえる女性たち：ジェンダー関係の変革に向けて』農山漁村文化協会, p. 145—180
- ・農林水産省(2012)「農村女性による起業活動実態調査」
- ・宮城道子(1996)「農村ではじめる女性起業—もうひとつの夢づくり—」(社)農山漁村女性・生活活動支援協会, p. 114